

- ・営農関連技術や新品種の開発・実証・普及
- ・トータル生産コストの低減、GAP認証取得の支援
- ・TAC活動の強化・人材育成、事業継承の取り組み支援

マニュアルがなく、熟練の技や感覚が必要とされてきた農業では、労働力不足や技術の継承が喫緊の課題となっています。こうした課題を解決するため、JA全農耕種総合対策部では、スマート農業の導入に注力。

営農管理システム「Z-GIS」や栽培管理支援システム「ザルビオ・フィールドマネージャー」などの活用を支援しています。安価で導入しやすい各システムの特長や他サービスとの連携についてお聞きしました。

# Z-GIS、ザルビオでデジタル化を支援



## Z-GIS

### 他サービスと連携

### 農地情報を一括管理

#### Q Z-GISとは？

**平野さん** Z-GISは、JA全農が2018年に始めた営農管理システムです。これまで白地図に手書きしていた圃場面積や作付品種などさまざまな営農情報を電子化。地図と結び付けて分かりやすく表示でき、インターネット環境があればどこからでも見られるのが特長です。情報はクラウドに保存して複数人で共有できるため、グローバルGAPの認証取得などにも活用できます。稲作の大規模生産者を中心に全国各地でご利用いただいております。ユーザー数は年々増加しています。

#### Q 他社サービスとの連携は？

**大越さん**「Excel(Microsoft社)」で出力するため、他社サービスとの連携が簡単にできるのも強みの一つです。ザルビオや営農支援サービス「天晴れ」などにも対応しており、連携すると各サービ

## ザルビオ

### 生育をデータで可視化

### 病害をいち早く予測

#### Q ザルビオとは？

**平野さん** ザルビオは、作物や品種、気象などの情報や人工衛星からの画像を、AIを使って解析することで、最適な栽培管理を提案する栽培管理支援システムです。ドイツのBASFデジタルファーマーミング社と協業し、21年にサービスを開始。生育や病害の予測、雑草に応じた防除提案が可能で、熟練者の経験や感覚がデータによって可視化できるようになりました。生育状況が明確になったことで、最適な農薬散布や施肥につながっています。

#### Q 反響ややりがいは？

**池町さん** 利用する生産者



Z-GISの圃場地図を利用したラジコンヘリ防除

の情報を農地ごとに閲覧できるため、さらに実用性が向上。農地の集約が進む中、圃場の情報や作業指示、作業内容をデータ化することで、効率的な管理が可能です。

#### Q 今後の目標は？

**大越さん** さらなる会員数の増加、拡大を目指します。そのために、全農の事業所から県本部を通じて、各JAや生産者向けの操作研修会を開催しています。

実際に導入したJAでは、圃場数が多く、システム化が難しかった共同防除を効率的に管理できるようになったという事例もあります。JAや生産者から感謝されるとてもうれしく、仕事の原動力になっています。

を訪問した際に、「こんな夢みたいな機能があるなんて」と感動の言葉をいただきました。またある県では、病害虫防除所のいもち病予測が発表されるよりも、早くザルビオが予測したこともあります。生産者の方にメリットを実感していただくことが励みとなっています。

#### Q 今後の展望は？

**池町さん** さまざまな生産者の方に使っていただくために、さらに機能を拡充していく計画です。始めは水稲、大豆からサービスを開始しましたが、機能を絞りつつ、麦、バレイシヨ、タマネギ、トウモロコシ、キャベツなど対応作物を広げています。Z-GISやザルビオで農作業を「見える化」することで、作業の効率化や後継者の育成に貢献していきます。



JA全農 耕種総合対策部  
スマート農業推進課

課長 平野幸教さん(上)

1993年入会。営農技術センターで花の品種改良や青果センターでの営業を経て、現職。

池町健太さん(右)

2011年入会。営農技術センターや耕種資材部で農業を担当し、21年4月から同課でザルビオの普及を担当する。

大越将大さん(左)

2017年入会。営農技術センターや内閣官房、デジタル庁への出向を経て、22年4月から同課でZ-GISの普及を担当。